

# 発達障害の支援—思春期を生きる—

対象

医師、保健師、看護師、養護教諭、教諭、保育士等、学校関係者

- 日時 平成24年10月28日(日) 10時00分～16時00分(9時30分開場)
- 場所 メルパルク京都 5F会議室A「京極」  
〒600-8216 京都市下京区東洞院通七条下ル東塩小路町676番13  
電話 075-352-7444(代表)
- 代表世話人 滋賀県小児保健協会 会長、滋賀医科大学小児科学講座 教授 竹内 義博
- 主催 日本小児保健協会
- 後援 滋賀県(予定)
- 会費 無料
- 定員 先着240名



## プログラム：

開会挨拶

座長 竹内 義博(滋賀県小児保健協会 会長、滋賀医科大学小児科学講座 教授)

基調講演「ええやん ちがっても ～思春期の課題と包括的支援～」

…………… 兵庫県こころのケアセンター 副センター長 兼 研究部長、児童精神科医 亀岡 智美

基調講演「発達障害と非行との関わりについて」

…………… 京都児童鑑別所 法務技官、児童精神科医 定本ゆきこ

基調講演「発達障害の思春期課題：ソーシャルスキルトレーニングを含めて」

…………… Rabbit Developmental Research 代表、小児科医 平岩 幹男

<昼食休憩>

座長 平岩 幹男(Rabbit Developmental Research 代表)

基調講演「高等教育のあり方について—思春期の学校生活を支える—」

…………… 滋賀医科大学小児科学講座 客員准教授、前国立特別支援教育総合研究所 統括研究員 藤井 茂樹

基調講演「発達障害のある人に対する就労支援について」

…………… 宇都宮大学教育学部特別支援教育専攻 教授 梅永 雄二

<休憩>

座長 岡田 眞子(滋賀医科大学小児科学講座 非常勤講師)

症例提示 …………… 滋賀医科大学医学部附属病院小児科 阪上 由子

総合討論、質疑応答

パネリスト：亀岡 智美・定本ゆきこ・平岩 幹男・藤井 茂樹・梅永 雄二

閉会挨拶

平岩 幹男(Rabbit Developmental Research 代表)

(敬称略)

# 発達障害の支援—思春期を生きる—

## ええやん ちがっても ～思春期の課題と 包括的支援～

かめおか ともみ  
亀岡 智美

兵庫県こころのケアセンター  
副センター長 兼 研究部長  
児童精神科医



### ● 略歴

和歌山県立医科大学卒業。大阪府立病院を経て、大阪府立中宮病院松心園に勤務。自閉症の子どもたちの診療・療育に携わる。2001年より大阪府こころの健康総合センターに勤務。大阪府の発達障害者支援体制整備検討委員会委員や特別支援教育連携協議会委員などを務め、成人の発達障害者の支援体制の検討にも関わった。2006年より、大阪教育大学学校危機メンタルサポートセンター客員教授。2010年より、大阪大学大学院連合小児発達学研究課招へい教授。2012年度より現職。専門は、発達障害およびストレス関連障害の臨床。

最近、発達障害についての概念は、一般にも広く知られるようになりました。また、発達障害者支援法の施行以降、学校や地域社会においても、さまざまな支援が展開されています。そして、それに伴って、発達障害の診断ニーズは急激に増加し、多くの子どもたちが小児科や小児精神科を受診するようになりました。

一方、発達障害の特性を有する子どもたちは、その成長とともに、状態像や適応の度合いが変化することもあり、一人一人の子どもとそのご家族に適合した支援を提供するためには、各ライフステージに応じたさまざまな配慮が必要であると考えられています。

今回は、人生の中でも、大きな変換点である思春期に焦点を当てて、発達障害の子どもたちが乗り越えなければならない課題とその支援の在り方について、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

## 発達障害と非行との 関わりについて

さだもと  
定本ゆきこ

京都児童鑑別所 法務技官  
児童精神科医



### ● 略歴

1985年奈良県立医科大学卒業。淀川キリスト教病院等での臨床研修を経て、京都大学医学部付属病院精神科入局。1991年より現職。非行少年の鑑別業務に携わっている。非行の背景にある虐待、発達障害との関連等をテーマに研究や講演活動も多い。DVや薬物など子どもを巡る社会的問題にも視点を置き、地元の各機関と連携し臨床活動を展開している。主な共著書に、「発達障害の臨床心理学（2010年東大出版）」「思春期を生きる発達障害（2010年創元社）」

発達障害と非行・犯罪が無前提につながっているものだというのは誤解です。発達障害を有しながら健やかに育ち、ますます円満な社会生活を送っている例は数え切れません。

ただし、障害特性がある以上、周りにそれが理解され適切な支援がなされないならば、さまざまな場面で誤解や軋轢を招きやすく、情緒や行動面に問題を来たしてしまうリスクはあると言わなければなりません。なぜなら、障害の存在が気付かれず、周囲に特性を理解されず支援や配慮を受けないままに思春期青年期を迎えてしまったことで、自己像や対人関係の持ち方に大きな課題を残し、ひいては逸脱行動に至ってしまった少年たちの例を、私たちは目の当たりにしてきたからです。

過度に不安に苛まれる必要はありません。けれども、発達障害を有しながら成長する過程の中で、子どもと周囲はどのような課題に直面し、またどのようなリスクに陥りやすいのかを正しく理解し、現実的に対応していくことは重要なことだと考えます。



## 発達障害の思春期課題： ソーシャルスキル トレーニングを含めて

ひらいわ みきお  
平岩 幹男

Rabbit Developmental Research 代表  
小児科医



### ● 略歴

1951年戸畑市（現北九州市）生まれ、1976年東京大学医学部卒業、1978年帝京大学医学部小児科、1992年戸田市立医療保健センター、2001年母子保健奨励賞、毎日新聞社賞、2007年同退職、Rabbit Developmental Research 開設。日本小児保健協会理事、日本小児科学会監事、埼玉小児保健協会会長、独立行政法人国立成育医療研究センター理事、東京大学医学部小児科非常勤講師、中島病院附属なかじまクリニック発達外来。

発達障害を抱えた思春期の子どもたちはそれまでに診断されていないことしばしばであり、この時期の二次障害をきっかけとして診断されることも少なくない。二次障害としては不登校、ひきこもりなどからうつ病やパニック障害など多岐にわたる。発達障害では行動やコミュニケーションの問題を抱えるために、叱られたり注意されたりすることが多く、そのために self-esteem の低下を来しやすい。思春期はそれ以外の子どもたちにおいても self-esteem のゆれが大きな時期であり、発達障害を抱えている子どもたちのサポートにおいては self-esteem をいかに支えるかは大きな課題である。また第二次性徴を来す時期でもあり、性の問題を抱えることしばしばある。今回はこれらの問題について概説する。

## 高等教育のあり方について —思春期の学校生活を 支える—

ふじい しげき  
藤井 茂樹

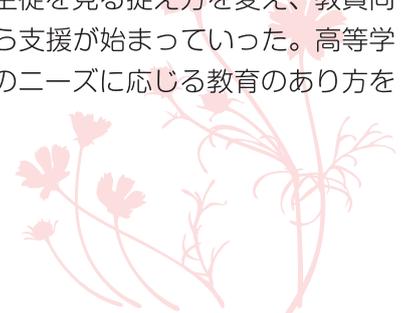
滋賀医科大学小児科学講座  
客員准教授  
前国立特別支援教育総合研究所 統括研究員



### ● 略歴

兵庫教育大学大学院障害児教育専攻修了。滋賀県公立小学校教諭、滋賀県湖南市発達支援室 室長（障害のある人の生涯にわたる一貫した支援システムの構築と運用）、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 総括研究員（特別支援教育の推進と発達障害児の指導・支援の在り方についての研究、発達障害の二次障害に関する研究）。滋賀医科大学小児科学講座客員准教授、現在に至る。

高等学校における特別支援教育のあり方から、発達障害生徒の指導・支援の現状と今後の課題について論じる。高等学校における特別支援教育も、ニーズベースモデル（多様性前提指導）の視点に立つことが重要である。何らかの課題のある生徒がいれば、まずはその特性を踏まえ、つまづきの背景に何があるのか分析し仮説を立てて、学校体制や学級体制、授業づくりを変え、すべての生徒のポテンシャルをあげていこうとすることである。本報告では、文部科学省の指定を受け取り組んだ高等学校の実践を中心に述べる。特別でない特別支援教育を柱に、学力の保障（わかる授業、実態を踏まえた指導）と自主活動の育成に取り組んだ高校である。一人一人の生徒が抱える課題を捉えるため、教員の生徒を見る捉え方を変え、教員同士の共通認識から支援が始まっていった。高等学校における、個のニーズに応じる教育のあり方を検討したい。



## 発達障害のある人に対する 就労支援について

うめなが ゆうじ  
梅永 雄二

宇都宮大学教育学部特別支援教育専攻教授



### ● 略歴

教育学博士、臨床心理士、特別支援教育士SV、自閉症スペクトラム支援士 Expert

昭和58年4月 雇用促進事業団（現：独立行政法人高齢・障害者・求職者雇用支援機構）入社（職名：障害者職業カウンセラー）

兵庫、大阪、南大阪支所、東京の各障害者職業センター勤務後、障害者職業総合センター勤務（職名：研究員）

その後明星大学人文学部心理・教育学科専任講師、助教授を経て現職

発達障害の人たちが就労および職場定着がうまくいかないことの原因は、適切なジョブマッチングがなされていないことと対人関係の困難性がその多くを占めています。

しかしながら、対人関係が困難な自閉症スペクトラム等の発達障害者に対人関係スキルを獲得させるのは限界があります。

また、対人関係スキルだけではない日常生活スキルが十分に獲得されていない発達障害者も多く、そのようなライフスキルの問題が就労を妨げている場合も数多く見られます。

仕事そのものの能力のことをハードスキル、対人関係や日常生活など仕事以外のスキルのことをソフトスキルと言いますが、ライフスキルの多くはこのソフトスキルが含まれます。

今回の講演では、発達障害者のライフスキルという視点から就労支援のあり方についてお話ししたいと思います。

## 症例提示

さかうえ ゆうこ  
阪上 由子

滋賀医科大学医学部附属病院小児科



### ● 略歴

小児科専門医、日本小児精神神経学会認定医。滋賀医科大学小児科学講座特任助教。1999年滋賀医科大学医学部卒業。同附属病院小児科での研修後、野洲病院にて一般小児科の診療に従事した。2006年より滋賀医科大学附属病院にて主に発達障害の診療に従事している。共著に『よくわかる小児保健』ミネルバ出版 など

思春期は性ホルモンの分泌で始まる体の変化とそれに随伴する情緒面の変貌期と位置づけられ、外面的な身体の変化と内面からつきあがる本能的衝動に向かい合うことが求められる時期です。また、それまで親との間で成立していた安全保障感を踏み台として親からの精神的離脱を始めると同時に同性の仲間との親密な交流を通して主体的な集団参加、社会参加を経験していく時期でもあります。こうした身体変化、親子関係の変化、心理・社会的変化の3つの変化を受け入れ、自己に統合していくことが、思春期からそれに続く青年期の課題です。これらの課題を乗り越え、最終的に社会における「自分なりの立ち位置」を見つけ、自立した生活を送るために必要な支援について、症例提示を通してフロアの皆さんと共に理解を深めていきたいと思います。

お問い合わせ先：日本小児保健協会 事務局

〒112-0004 東京都文京区後楽 1-1-5 第一馬上ビル 9階

電話 03-3868-3093 FAX 03-3868-3092

E-mail jsch-soc@umin.ac.jp